

竜宮城

川崎ゆきお

「おかしいとは思わんかね」

新入社員の室田が、社員食堂で先輩の若い社員に質問し続けている。

「そういえば、まあ、そうですねえ。あまり考えたことなかったですよ」

「私は五十前だよ。それで採用された。正社員だ。別に通信設備の経験者じゃない」

室田の初任給は若い社員よりも高かった。

「このランチだってそうだよ。これが百円とは、恐れ入ったよ」

「いっそのこと無料にしてくれればいいんですが」

「それに一人でできることを三人でやってる。暇でしょうがない。他の会社なら、人員整理で半分以上は解雇されるよ。いや三分の二以上解雇だ。それなのに、私のような中高年者を入れてる。いや、感謝してるよ。前の会社に比べれば天国だ。仕事は楽だし、給料もいい」

「じゃあ室田さん、問題ないじゃないですか」

「それが問題なんだよ。おかしいとは思わないか...君は？ あ、悪い、先輩だったね」

若い社員はただ笑っている。

「研修だけどね、どんなことするの？」

「雄琴温泉で一泊するだけです。まあ、慰安旅行だと思えばいいんじゃないですか。ちょっと話聞くだけで終わりますよ。後は宴会で、そのあとはお楽しみが待ってますよ」

「先輩も行ったのかね？」

「雄琴は何回も行ってますよ。今年は東南アジアの研修を申し込んでます。室田さんは新人ですから、近場です」

「研修とは別に、慰安旅行もあるんだよね」

「人気ないから、来年からはないとか」

「どうして？」

「研修旅行は手当が出ますからね」

「そういうことか」

室田の仕事は、請求書の印刷機のインク交換だった。それを三人でやっているのだが、一度交換すると三時間は持つ。三人で見張っているだけの仕事だった。

通信設備会社に就職したのだが、通信とは関係のない作業だった。これなら専門知識も必要ではない。

インク交換は二回ほどで覚えた。

室田はこんな楽な会社勤めがあるとはどうしても思えない。

研修の雄琴温泉では、竜宮城で遊ぶようないい思いをさせてもらい、初任給は人員整理で首になった会社よりも高かった。

しかし、室田は退社した。この待遇が薄気味悪かったからだ。

了